日本的品質管理について

市　川　邦　介*

統計学を基礎とした検査中心のアメリカ生れの品質管理 (Quality Control) が戦後日本に導入され36年になる．日本では TQC (Total QC) または CWQC (Company Wide QC) すなわち全員参加あるいは全社的品質管理として形を変えて発展してきた．

1960年代に外国と技術提携してオースチン，ヒルマンやルノーの組立をしていた国がTQCを活用して品質が良くて，価格も安く，省エネで故障の少ない日本車をどんどん生産し貿易摩擦まで引き起こしている．自動車に限らずカメラ，時計，電子コピー，コンピューター，VTR，TV，ラジカセ，IC，鉄鋼，ロボット等々今や“Made in Japan”というのは昔のおもかげを一新して，信頼性があって使い易い魅力製品として世界の信用を博している．

この陰には日本人の勤勉さ，関連技術の研究等によるが，この中でも良品質の製品を安価に大量生産するために生産技術としてTQCの果した役割は大きく，今や日本の生産技術は正に世界一ではないかと思う．

昨年は欧米に自動車関係工場の視察に行ったが，ドイツのフォルクスワーゲン，ポルシェではそれぞれ10%，70%という外国人労働者，アメリカGMでは白黒の人種問題があり，管理者の意思徹底も言葉の関係で思うにまかせず生産管理方式は検査中心にならざるをえない．日本では単一民族で言葉も日本語，教育，訓練もやり易く，標準化，工程管理のやり方も“品質は工程中に作り込む”という考え方が浸透し易い恵まれた環境にあることを改めて知った．アメリカ人が“If Japan Can! Why can't we ?”(日本にできてアメリカに出来ぬこと)，それは日本の品質管理だと嘆いたのは有名な話である．

しかし，自動車，カメラ，時計等いずれをとっても日本製品は外国品の改良品である．外国から見本を示してもらってから出発する．日本の生産技術は外国からの見本があればそれ以上のものを作る力があるのに，日本人自身がオリジナルな見本を示すことが大変乏しいのは残念である．資源，エネルギーの無に等しいわが国が，将来発展するためには，基礎的な研究，創造的な研究を大いに進め，オリジナリティーのある製品をどんどん出してもらいたいものである．

* 市川邦介 (Kunisuke ICHIKAWA)，大阪大学，名誉教授，工学博士，醗酵工学